

講演概要

講師自身の体験をもとに、第二次世界大戦中の日本の状況、特に戦時下の教育やさつま町周辺の空襲事例、同町出身の特攻隊員のことなどをお話しいただいた。中でも町が受け入れた学童疎開^{そかい}の実態や、身近にある学校、駅、工場、寺院などが空襲の標的となったことなどが臨場感をもって語られた。

講演終了後は、館内の郷土資料室にて町内に残る戦争関連資料の展示見学会が行われた。

1. 講師の経歴と講演活動

- 講師の紹介

三浦哲郎氏（昭和5年生まれ）。^{えいしん}盈進国民学校（現在の盈進小学校）卒。日中戦争開始時は7歳、終戦時は15歳で戦争には行っていない。3つ年上の世代までは戦争に行っている。

- 歴史への関心

高校時代の担任の影響で歴史に興味を持つ。先生に誘われた勉強会をきっかけに関心を深めた。

- 講演活動

約14年前から文化財ボランティアガイド「さつまガイド」に所属。文化財の案内のほか、小学生などに子どもながらに経験した「戦争」について語り伝えている。

2. 戦時下のさつま町の生活と社会状況

- 関与した戦争

さつま町の人々は、薩英戦争から太平洋戦争に至るまで多くの戦争に参加している。日中・太平洋戦争だけでも多数の戦死者を出しているが、その半数以上は餓死や海難死であったという。

- 学校の状況

当時の学校には電気や給食がなく、水道は1階のみ。トイレは汲み取り式で、野球やサッカーの道具もなかった。

- 食糧不足と発育への影響

農家でない家庭は食糧不足に苦しみ、米などの食糧品は配給制度を頼りにしていた。栄養不足は子供たちの発育にも影響を与え、当時の小学生（11歳）の平均身長は、現在より15cmも低かった。

- 学童疎開

さつま町には、中種子町、^{な かつ た ね} 甕 島（里村、上甕村）から合計 2,293 人の児童が疎開してきた。教室不足のため、2 人掛けの机を 3 人で使って勉強した。空襲で校舎が狙われたため、近くの杉山等で授業を受けることもあったが、当時の机は松の木でできていて非常に重く、教室から運び出すのがとても大変だった。

戦時中は全国で赤痢が流行していて、疎開先で^{り かん}罹患し、亡くなった児童もいた。

3. B29 爆撃機と「^{ぜろせん}零戦」

- B29 による空襲

B29 は当初、軍事施設を対象に高度 1 万メートルから爆撃したが、命中率が低い
ため、後に高度を下げて攻撃するようになった。米軍は、カーティス・ルメイ少将
の指揮下で、都市部への大規模な絨毯^{じゅうたん}爆撃を開始。東京大空襲や鹿児島空襲で
甚^{じん}大^{だい}な被害をもたらした。

- ^{れいしきかんじょうせんとうき} 零式艦上戦闘機（^{ぜろせん} 零戦）

極限の軽量化により、卓越^{たくえつ}した運動性能を誇った。昭和 15 年、中国戦線での初陣では圧倒的な強さを見せ、空中戦で「敵の背後を取る」ことを容易にした。そのため、米軍は「零戦と遭遇したら空中戦はするな」と命令した。

一方で、被弾に弱いことや機体のもろさなど、構造上の欠点もあった。

4. さつま町周辺の空襲と被害状況

- 空襲の概要

旧薩摩町側から川沿いに進入したプロペラ機が、学校、橋、寺院、工場など目立つ施設を標的に機銃掃射^{きじゅうそうしゃ}や爆撃を行った。爆弾の多くは命中せず、半分は不発弾だったとも。急速な量産による品質低下が指摘されている。

^{しょういだん} 焼夷弾の投下がなかったことは幸いなことであった。

- 具体的な被害

- 盈進国民学校（盈進校）

木造校舎が狙われたが、機銃弾は校庭に多数の穴を開けるに留まり、爆弾は学校裏の製材所の土場（現在は林田内科）に落ちて、直径 5 ～ 6 m、深さ 1 m 程の穴を開けた。

- 片倉製糸工場

衣料用の生糸^{きいと}を生産していたが、戦時中は、落下傘などの軍需物資用に転換さ

れていた。煙突が標的となり、繭の倉庫が曳光弾（※）で炎上。水路の水を使い、バケツリレーで消火した。爆弾も投下されたが、隣にあった警察署の庭に落ちた。

※ 通常の弾と混ぜて、数発に1発の割合で発射された。発火することで光るため、夜間や悪天候時でも弾道を確認することができた。

- ・信教寺周辺

寺院が狙われたが、爆弾は約20メートル離れた里芋畑に着弾。畑に隠れていた兄弟のうち、弟は助かったが兄（当時、盈進校高等科2年生）は即死だった。

- ・川内川で水泳中の子ども達

虎居橋上流で泳いでいた子ども達は、機銃掃射に気づき水に潜（もぐ）って回避した。幸いなことに死傷者は出なかった。

5. 特攻隊員の実態

- ・さつま町出身の特攻隊員：陸海軍合わせて4名。

- ・武（たけ）さん（18歳 海軍）、犬童（いぬどう）さん（17歳 海軍）

それぞれ大学1年生、高校生に相当する年齢で出撃。特攻により戦死。

- ・児島（こじま）さん（陸軍）

優秀なパイロットだったが、出撃待機中に終戦を迎え生還。

- ・末吉（すえよし）さん（所属不明）

出撃待機中に終戦を迎え生還。出撃直前に故郷上空を飛行したが、空襲と勘違（かた）いして皆隠れた。しかし、姉だけが弟だと気づき、旗を振って応（こた）えたという。

戦争末期は、敵艦隊の位置を索敵（さくてき）する飛行機が不足しており、加えて発見前に撃墜（げきつい）されることもあった。そのため、特攻隊員は攻撃目標が分からず出撃できないまま、待機することもあった。

6. 佐志の空中戦

日本の戦闘機2機と米軍機6機が佐志の上空で空中戦をした。日本機は撃墜され、1機は佐志仮屋原（かりやばる）に、もう1機は祁答院町大村（けどういんちょう）に落ちた。いずれも航空兵は無事で、農家で一緒に看病され部隊に復帰したという。

7. 最後に

私は 20 代の頃から、この言葉をテーマにしています。

「すべては知ることから始まる」

さつま町でも、戦時中にこんなことがあったということを知ってほしい。

そして、それぞれ、平和について考えてほしい。